

変態と植民地

——夢野久作『二重心臓』論——

脇坂健介

「キーワード」①夢野久作 ②異性装 ③植民地 ④民族的序列 ⑤パフォーマティブ」

はじめに

夢野久作の『二重心臓』は『オール讀物』に、昭和十年（一九三五）の九月号から十一月号まで三回にわたって連載された作品である。『二重心臓』は久作の作品の中でも、あまり知られていないものであるため、最初に内容を簡単に紹介しておきたい。

まずその冒頭において、ある殺人事件の発生を、新聞記事の引用を用いて明らかにする。その事件とは、「日本最初の探偵恐怖劇興行者」である轟九蔵が深夜、何者かに殺害されたというものだ。先輩と後輩の警官二人の会話によって犯行の詳細が語られ、先輩警官は実は生番小僧という強盗が犯人として既に捕まっており、事件は解決済みなのだと言語。ところがその頃、九蔵の「恐怖劇」の主演であり、彼と同居していた女優・天

川呉羽に、劇場の支配人・笠から、女性同性愛者の疑惑と九蔵殺害の嫌疑がかけられる。両方の嫌疑を否定する呉羽は、九蔵に代わって支配人となった笠に対し、自身の「一生涯の秘密」を暴露する芝居を次の公演にしたいといい、結婚をちらつかせることで、笠を説得する。説得に成功した呉羽は、舞台付きの作家・江馬兆策に自身の生い立ちを語って、それをもとに脚本を書くように依頼する。同じように結婚をちらつかされ、有頂天になった兆策に対し、二人の密会を盗み見していた兆策の妹・美鳥は、呉羽が自分に同性愛的な愛情を持っているのだと告げる。やがて、兆策が呉羽の話をもとに書き上げた芝居「二重心臓」が公演されるが、それは呉羽が兆策に話した自身の生い立ち、つまり自分が九蔵の子供ではないことを暴露するものであった。しかも劇中で九蔵殺害の光景を再現した呉羽は、九蔵殺害は自分の犯行であると告白。そればかりか、実は自分は生まれてきたときは男性であったのが、女装しているうちに自分の性別が曖昧になってきたのだと語りだす。美鳥と出会ったことで「男性としての良心」に目覚めたという呉羽だったが、美鳥と結ばれることは自ら否定し、ステージの上で頭を拳銃で打ち抜き、劇は終わりを迎えることになる。

連載当時『二重心臓』は「懸賞」小説としての側面も持っていた。『オール読物』九月号の編集後記では「本格的探偵物で、同時に傑れた大衆文学である夢野久作氏の『二重心臓』の連載は「本年度下半期の大衆文壇のメインイベントの一つ」であり、「懸賞問題としても本誌読者の興味を湧かし、必ずや江湖の称賛を博する事請合ひ」と述べられている。同誌には応募規定のページがあり、「處で轟氏殺害の真犯人は果たして誰か？犯人は既に第一回に登場してゐます。名探偵出でよ!!」という呼びかけと、商品の一覧が掲載されている。実際、読者の受けは上々だったようだ。十一月号には「犯人探し大懸賞」は応募数萬に達し大盛況」であったと記されており、十二月号の当選者発表には相当数の人名が確認できる。また、十二月号の「愛読者通信」

を見ると『二重心臓』について、母親が「慎重犯人の追窮に努めたが結局名探偵でしかなかったやうだ。僕も惜しいことに犯人の目星をつけながらオール編に密告せなかつたのが残念」といった投書や「オール十一月号の素晴らしさ」として菊池寛らと並べられて「夢野先生の『二重心臓』に至つてはビックリ・サムグリ・タンバグリ」と言及された投稿を見ることが出来る。

だが、このような同時代の読者の評価に比べて、その後の『二重心臓』の評価は決して高いものではない。中島河太郎は「行き届かぬ点が多い」とし「男女倒錯の意外性を秘めているのだが、語りたいたことが多過ぎたように思える」と述べている。⁽¹⁾ また西原和海は「本格派探偵小説ふうの謎ときの要素が希薄で、犯人当て小説としては適正に欠けているように思われる」とし、「作品の完成度からいっても、右の記事にあるような『大傑作』といったレビューからは程遠く、久作文学の水準を相当下回るもの」であり、「作中人物の名前の混乱や、表現上の誤りなど、読者として首をかしげざるを得ない瑕瑾も少なくない」と述べ、中島以上に低い評価を下している。⁽²⁾ このように『二重心臓』は久作の作品のなかでも評価が低く、今までのところ単独でこの作品を論じた論文や批評も存在しない。だが『二重心臓』には異性装、つまり中島が指摘しているように「男女倒錯」のテーマを見ることが出来る。また異性装の結果、自分が男女どちらなのか分からなくなるといふ性的アイデンティティの揺らぎをめぐる問題は他の久作作品にも共通したものである。⁽³⁾ 『二重心臓』には、久作の作品の特徴をなすテーマが盛り込まれており、単なる失敗作として片づけてしまふには惜しいように思われるのだ。

そこで本論では、異性装の問題を中心に取り上げながら、『二重心臓』における性の問題に関する考察を行いたい。また、性の問題と密接に関連する植民地に対する視線や権力関係についても論じる。その上で、朝鮮

の兄妹や生蕃小僧など、植民地表象が飛び交う『二重心臓』において、性と植民地が最終的にどのように関係し、呉羽の異性装がどのような役割を果たしているのかを分析することで、作品評価の見直しを試みたい。

第一節 『二重心臓』における「物語」と〈真相〉

『二重心臓』は先述した物語を主軸としてはいるが、実際には関係者の証言や語りが錯綜しながら進展していくという複雑な構造を持っている。こうした複雑さによって生じた矛盾点は、先行研究においては探偵小説としての出来の悪さだとされてきた。だがそうした矛盾は、むしろいくつもの〈真相〉が存在する可能性を示し、ただ一つの〈真相〉にたどり着けないという物語の〈決定不能性〉を描いているのではない。実際そうした〈決定不能性〉は九蔵殺害事件においてみることができるが、それを考察するためには、まず事件についてどのように警官が語っているのかを確認する必要があるだろう。

二人の警官のうちの先輩格の警官によれば、九蔵は自宅の机に向かって座っていたところを「犯人が背後から抱き付いて、心臓をグッと一突き殺したらしい」とされ、その殺害方法は、「兇悪な奴でも不意打にコレ程深くは刺し得ない筈」と語られるほど強烈なものであった。そして先輩警官は、九蔵殺害事件の状況について更に次のように述べている。

大きな足跡があったんだ。モウ拭いてしまってるが、向うの北向きの一番左側の窓から入ってきたんだね。ところでこの辺では昨夜の二時ちょっと前ぐらいから電光がして一時間ばかり烈しい驟雨があったん

だが、その足跡は雨に濡れた形跡がない。ホコリだらけの足跡だからツマリその足跡の主は推定、零時半乃至一時四十分頃までの間にあの窓から入ってきた事になる

警官の分析では犯人は雨の降る前に侵入したとされ、九蔵の死亡推定時刻は「今朝の三時半、乃至四時半頃だ」とされる。時系列に沿って整理すれば、零時半から一時四十分に侵入、二時から三時ぐらいまで雨が降り、九蔵は三時半から四時半の間に殺害されたということになるだろう。つまり窓から侵入した人物は、侵入から一時間以上たった後に九蔵を殺害したことになる。先ほどの時系列に沿えば、死亡推定時刻まで犯人は邸内に居たか、あるいは出直した上で、改めて窓以外から侵入したということになる。だが部屋に入った侵入者が、一時間以上も部屋にいたという推理はあまり現実的ではない。窓から侵入したということは、玄関から入ることと邸内の他の人物に姿を見られることを避けたかったためだと考えるのが自然であり、そのような慎重さを持つ侵入者が、なにもせずに一時間以上も九蔵の部屋にいたとは考えにくいからだ。つまり警察側の推理によれば、一時四十分までの窓からの侵入と、死亡推定時刻の三時半から四時半までの侵入ルートは異なっている可能性が高く、犯人は時間をずらして、九蔵の部屋に二回侵入したことになるのである。

このような警察側の見解に対し、逮捕された生蕃小僧は「昨夜の一時半頃」に侵入し、「二千円の小切手を書かせて立ち去りました」が、「万一密告あしめえかと思ふ」あまり「今度は自動電話をかけて待っているように命じて引き返し、十分に様子を探ってから玄関の締りを外させ」たうえで再侵入し、「ちょうど三時半頃だったと思います」と九蔵の殺害までの流れを語っている。後に判明するが、生蕃小僧は幾度かにわたり、九蔵の過去を材料に九蔵を脅迫しており、それが事件当日に受け渡された小切手とつながっている。ここでの生

蕃小僧の陳述は警察の見解、つまり二回に分けられた侵入、死亡推定時刻、侵入ルートの変化などと一致しており、彼が轟九蔵殺しの犯人であることは確実であるように思われる。だが先述したように、呉羽は「二重心臓」の公演中に九蔵を殺したのは生蕃小僧ではなく、自分であると告白することになるのだ。

その呉羽の告白は、舞台「二重心臓」で事件を再現する形でなされるが、それは次のようなものである。「二時二十五分」に生蕃小僧が窓から侵入し、九蔵は小切手を与え、生蕃小僧は立ち去る。その後、電話がかかってきて、九蔵は部屋を出る。入れ替わりに呉羽が侵入し、九蔵の机に置いてあったナイフを隠し持ちながら、美鳥との結婚を九蔵に訴えるが拒否され、それに激高して九蔵を殺害する。そこに生蕃小僧が戻ってきて、呉羽に自分が身代わりになると告げて、立ち去ってゆく。その際に「その窓は、そのまんま開け放しといった方がいいね。閉め切っとくと、オマハンの首に縄がかかるんだ」と生蕃小僧は言い、「やがてバラバラと雨の音……烈しい電光……」が起る。

この場面で重要なのは、九蔵殺害が「雨の音」の直前だということだ。警官が語る当時の天候は「二時ちょっと前ぐらいから」雨が降り出したというものだった。ということは呉羽による九蔵殺害は、雨の降りだした「二時ちょっと前」より前だということになるだろう。つまり警察が科学的に導き出した九蔵の死亡推定時刻三時半から四時半と、呉羽が九蔵を殺害したという「二時ちょっと前」は矛盾しているのである。

このように警察の見解―生蕃小僧の自白と呉羽の告白は、かみ合っているようでもかみ合わない。試しに生蕃小僧の自白と警察の主張が〈真相〉であると仮定してみよう。そうすると生蕃小僧は一時間以上経ってから、死亡推定時刻直前である三時ごろに九蔵宅へ戻り、犯行に及んだことになる。しかも、九蔵は「背後から抱きつ」かれ、胸にナイフを突き立てられ殺害されていた。生蕃小僧は九蔵と「差し向かい」で会話していたと述

べており、更に生蕃小僧と九蔵が脅迫する／される関係であったことを踏まえれば、九蔵が後ろを向くという油断を見せるかは疑問である。だが呉羽の告白を採用すると、今度は警察の死亡推定時刻との決定的な食い違いが発生してしまう。結果的に二人の自白だけでは、九蔵殺害の犯人を確定することができないのである。

このような矛盾を探偵小説としての欠陥とあげつらうことは確かに可能であろう。実際、この小説が当時、懸賞のかかった「犯人当て小説」であった以上、読者に対する正解としての〈真相〉を明らかにする必要がある。いくら発表当時の読者の評価が高かったとはいえ、それぞれの見解や告白が矛盾し、犯人を決定することができないというのでは、一つの〈真相〉の存在を前提とした宣伝や読者の期待を裏切った作品だともいえるのだ。そして、このように考えれば、先行研究にあるような、探偵小説としての失敗作という『二重心臓』の評価も妥当なものだということになる。

しかし「犯人当て」という部分が不適合であるという理由で下された評価は、果たして生産的であろうか。むしろこの食い違う証言と結論は、『二重心臓』という作品全体を象徴する物語の〈決定不能性〉を示してはいないだろうか。九蔵殺害の犯人が生蕃小僧なのか、呉羽なのか、それとも別の第三者なのか。〈真犯人〉が確定できず、それぞれの見解や自白が微妙に重なり合いながらも矛盾するという状況、それこそがこれまで考察してきた事件の性質であった。しかもそうしてみると、〈真相〉を確定できない〈決定不能性〉という事態は、九蔵殺害の犯人捜しにだけに当てはまるわけではない。それは『二重心臓』において描かれる様々な人物の性別と恋愛関係にも見ることができるとのだ。

『二重心臓』において当初、呉羽は女性として描かれているが、クライマックスの告白では自らを男性であると主張することになる。呉羽の性別は女性から男性へと変化するわけだが、それまでの過程で、呉羽は周囲

の人物と様々な恋愛関係を構築している。まず殺人事件の後の笠支配人との会話を考察しよう。劇場物置の片隅に呉羽を呼び出した笠はまず、「貴女と轟さんの間には何も関係はないんですね。普通の関係以外には……」と問う。ここで笠が聞いているのは轟邸の女中であるヨネ子が探ろうとしていた九蔵と呉羽の性的関係である。呉羽はそれを否定するが、笠は更に迫る。それは笠が九蔵から聞いた話として、呉羽が九蔵に対し、「結婚したい結婚したい」と訴えていたことは事実かどうかというものである。それを聞いて「血の気を喪った」呉羽に対し、笠は「クレハの奴飛んでもない人間と結婚しようと思っっている。あんな奴と結婚したら(中略)俺までも破滅しなくちゃならん」と九蔵から聞いたのだと告げ、その結婚したい相手とは誰なのかと問いたです。それに答えない呉羽に対して笠は、九蔵の言葉を再び持ち出す。九蔵は呉羽の結婚の相手が「兆策の妹のミドリ」であり呉羽は「同性愛」だと語ったというのだ。その上、笠は呉羽が九蔵に「あんな芝居ばかりさせられて来たもんだからイヨイヨドン底まで変態」になってしまい、「ミドリさんと同棲して、お姉さんお姉さんと呼ばれて暮らすことが出来さえすれば妾はモウ死んでも構わない」といったという話を持ち出して、更に呉羽を追及する。それに「辛うじて首肯いた」呉羽だったが、興味深いのは笠がそのあとでもう一度、「貴女が結婚したいと仰言るのは誰ですか」と問うていることである。

笠が九蔵から聞いた言葉と呉羽の首肯によって明らかになったように、呉羽の結婚したい相手とは兆策の妹・美鳥だったはずである。にもかかわらず、笠はもう一度結婚相手を聞き、それは「司馬兆策じゃないのですか」と問いかける。それを即座に否定した呉羽に対し、笠は「貴女が結婚したいなんて仰言ったのは、轟さんに対する何かの脅迫手段で、貴女の本心じゃなかったのですね」と迫るのである。なぜそのように考えるのか呉羽が問うと、笠は突然「僕と結婚してくれませんか」と求婚し、呉羽はその条件として自分が主催する

「探偵恐怖劇」の実施を求めることになるのだ。

ここで笠は自分から呉羽を女性同性愛者とする九蔵の話を持ち出しながら、それを自ら否定し、呉羽を異性愛者に置きかえ、結婚を申し込むという転倒をみせている。つまり笠は、呉羽が美鳥との結婚を求める女性の同性愛者ではなく、自分と結婚できる女性の異性愛者であると、さしたる根拠もなく信じているのだ。それゆえ呉羽の同性愛者としての振る舞いを、九蔵に対する「何かの脅迫手段」であると考え、それを呉羽の本心ではないと考えるのである。そして、それに対し呉羽は、笠が作り出した呉羽の物語―九蔵を脅迫するために同性愛者の振る舞いをする女性の異性愛者―に便乗し、見返りとしての結婚をちらつかせることで「探偵恐怖劇」の実施を約束させ、自分の有利な方へと進めていく。ここでの呉羽は笠の根拠に乏しい物語に便乗することで、利益を得ようとしているのにすぎない。そうした点からも笠の物語は、呉羽が自分と結婚できる女性の異性愛者であってほしいという願望の現れでしかないといえる。つまりこの一連のやり取りを持って呉羽が女性の異性愛者とすることは出来ないのである。

次に呉羽と兆策の会話を見てみよう。笠に恐怖劇の実施を約束させた呉羽は、兆策に対し、今から「一生の秘密」を話すからそれを「上演脚本」にしてほしいと求める。それを了承した兆策に対し、呉羽は自らの過去を語りだす。それは以下のようなものだ。

あるところに「無惨絵」などを得意としていた「甘木柳川」の子供、「三枝」というのがいた。この三枝とは幼少期の呉羽の事であるという。やくざの等々力一家の保護下にいた甘木家だが、その家に強盗である生蕃小僧が眼をつけた。等々力一家の親分、等々力九蔵は「名探偵肌」の人物であり、自分の縄張りの犯罪を次々に解決していた。それゆえ流れの泥棒は彼の縄張りを避けていたが、生蕃小僧はどうかして彼を「ノックア

ウト」しようとたくらんでいた。そこで生蕃小僧は等々力の妻の「不行跡」を調べて、等々力を脅迫し、しばらく自分のやることを見逃すよう求める。それを承知した等々力は、柳川の家に行って三枝を連れて帰り、密かに自分のもとに保護する。そしてその夜、生蕃小僧は柳川の家に入らし夫婦を惨殺する。しかし強盗でありながら、現金以外は盗まないという主義を持つ生蕃小僧は、ほとんど現金が無かった甘木家から何も盗むことが出来ず、逃走することになる。やがてやくざをやめた等々力が柳川の印形を利用し、財産や生命保険などを横領していたことを知った生蕃小僧は、自身を出し抜いた等々力を恨み、脅迫を始める。命の危機も感じた等々力は、自分が保護した三枝を連れて朝鮮にまで逃げたりもした。そう呉羽は語るのである。

この話からわかるように等々力、九蔵は殺害された轟、九蔵であり、甘木三枝は天川呉羽であり、実は二人は公表されているような親子関係にはないことが明らかにされる。そして九蔵が朝鮮に逃走していた際に拾った「朝鮮人」の子供が兆策・美鳥の兄妹なのである。

このような過去を話した上で、最近また生蕃小僧が脅迫文を送ってきたのだと呉羽は語る。脅迫状の内容は、九蔵と呉羽が実の親子でないことや、甘木柳川の財産を九蔵が横領したことに加え、九蔵と呉羽が事実上の夫婦であり、更に呉羽は兆策とも恋愛関係にあるというものだった。これを聞いた兆策はすぐに自分と呉羽の恋愛関係を否定し、呉羽もそれに同意する。その上で呉羽はこの脅迫文と同じことを笠支配人に言われたので、奴こそが生蕃小僧であると兆策に話し、笠の見張りを兆策に頼んだ上で、来月の十日以降に「それからの御相談」をしようと持ちかける。兆策は、「それからの御相談」として呉羽にほめかされた内容を自分との結婚の意思と予想して、狂喜するが、このような兆策が作り出した呉羽の物語―依頼と引き換えに、自分と結婚してくれる女性の異性愛者―もまた呉羽との会話を通じて兆作が作り上げたものだ。こうして、男性異性愛者の

兆策は、呉羽を女性の異性愛者として捉え、結婚をほのめかされたら勝手に信じて呉羽の指示に従うことになる。それは、笠の場合と同様にここでも呉羽は相手の願望を利用して、兆策を自分の協力者に仕立て上げたのだということもできるだろう。ただし、その結果、兆作が抱くことになる呉羽が自分との結婚を望む女性異性愛者だという物語にも、さしたる根拠はないのである。

しかし呉羽との恋愛をめぐる物語に関わるのは笠と兆作だけではない。更にもう一人、兆作の妹・美鳥がいる。兆作と呉羽の会談を盗み見していた美鳥は、呉羽の話を用意しようとしぬ。美鳥は「それからの御相談」を勝手に結婚のことだと考える兆策に対し、「お兄さんと結婚してもいいって事をハッキリ仰りゃしなかつたわ」と告げ、兆策が作り出した物語に、くさびを打ち込む。その上で、美鳥は呉羽が「深刻な変態心理の持ち主」であり、「妾が好きなのよ」と語る。更には呉羽が美鳥を「心の底から崇拜して」おり、それに対し美鳥は「怖くて仕様がなない」のだとも付け加える。恐怖の理由を美鳥は「同性愛なんて日本にだけしかない」もので「朝鮮ではソナナ話、聞いたこともない」からとし、「呉羽さんと同じ位に妾が呉羽さんを好きにならない限り、どうする事も出来ない」と述べる。美鳥はここで、呉羽を女性の同性愛者と見なし、女性の異性愛者である自分とは異なる「変態」として忌避しようとするのである。この場面で美鳥は、呉羽が女性の同性愛者だとする物語を作り上げ、彼女との恋愛関係を拒否する態度を示している。ただし、美鳥はその一方で「今度の事件の真相が一ペンにわか」ったと言ひ、「この世の中で一番醜い一番美しい謎」にも気づき、呉羽を鏡越しにみて「胸がドキドキドキドキしてきた」とも語っている。その謎の真相は美鳥自身も確信が無いとされるが、呉羽を「アンマリ美し過ぎる」と語り「耳まで赤くなってしまふ」その態度からは、実は呉羽の性セックスが男性ではないかという疑いが仄めかされているだろう。それは異性愛者の美鳥が作り上げた呉羽が

同性愛者の「変態」であるという物語を揺るがす要素といえる。

これら三者三様に構築された物語を、呉羽との恋愛関係をめぐる性⁽⁴⁾セックスと性的指向⁽⁴⁾セクシュアリティから整理してみると、笠と兆作は呉羽のセックスが女性でセクシュアリティが異性愛の人物であり、男性の異性愛者である自分と結婚できる人物として捉えている。一方で美鳥は、呉羽のセックスが女性でセクシュアリティは同性愛の人物として捉え、忌避する一方で、呉羽のセックスは男性でありセクシュアリティも異性愛の人物であることを仄めかしている。このように呉羽のセックスとセクシュアリティは相手のセクシュアリティから生じる願望と密接に関係し、根拠が乏しいままに構築されているのである。しかもこうした三者三様の物語の中で、呉羽のセクシュアリティは異性愛者と同性愛者の間で揺らいでいる。そして美鳥の仄めかしを重視するならば、呉羽のセックスもまた女性と男性の間で揺らいでいることになる。呉羽の恋愛に関わるセックスとセクシュアリティは、依然として〈決定不能〉なままなのだ。では呉羽自身は、自分が語る物語において、自分をどのように捉えているのだろうか。そして、九蔵殺害に関する〈決定不能性〉に対して、呉羽本人が舞台「二重心臓」で語る物語はたった一つの〈真相〉を示すことになるのだろうか。

第二節 異性装と支配からの解放

物語後半に開幕する舞台「二重心臓」は、生蕃小僧が甘木柳川の家を襲った事件を、呉羽が兆作に語ったのとはば同様に描き、そのまま第二幕へと移る。この幕の冒頭で兆作・美鳥の歌を聞いている九蔵は「もう日本人と変わらんわい」と呟いて、兄妹を養っている理由を語りだす。それは「悪魔的」になってしまった自分の

性格から「人間に時々立帰ってホッと一息したいため」であるという。そして二人が去った後で呉羽が登場すると、九蔵は生蕃小僧と自身の過去について語り、呉羽に生蕃小僧への復讐をさせたいがために今まで養育していたのだが、次第に「別の目的」が生まれたのだと言い出す。その「別の目的」とは、「お前をホントウに俺のものにしたくなった」から、「俺の妻になったつもりで……仕えてくれ」というものだ。

呉羽の舞台の中での九蔵は、生蕃小僧の犯行を予見しながらも、呉羽の両親に対して警告をせず、三歳の呉羽を事件の直前に半ば拉致するかたちで自分のもとに保護する。しかもこの地域には男の子を女装させて育てると無事に育つとする風習があり、呉羽はこうした風習に従って、自分も女装させられていた男の子だったのだと語ることになる。九蔵がこうした風習を知っていたかどうかには曖昧なところがあるが、この地域の人間である九蔵が呉羽の女装を知っていた可能性は高いとみるのが自然だろう。つまり男性であることを知っているながら呉羽を「俺のもの」にしたくなったという九蔵は、男性同性愛者であるとみることもできるのだ。しかも九蔵は呉羽に「妻になったつもりで」とも語っている。九蔵は三歳から育てた女装した男児に、成長した今でも女装を続けさせた上で同性愛的関係を、それも呉羽には男性ではなく「妻」として、つまり男性同性愛における女役としての関係を求めるという倒錯した欲望を見せているとも解することができるのである。

こうした九蔵の変態的ともれる欲望は例えば、呉羽が自分に対する九蔵の愛情が「貴方のお人形さんに生まれ付いている犬猫」に向けられるような、「不自然な可愛がられ方」であったと語ることで、その異常性を仄めかしている場面にも見ることができらるだろう。呉羽が自らの過去を語りながら進む舞台「二重心臓」の中の九蔵は、少なくとも呉羽の語りに従う限りは、変態的な欲望を持つ人物として描かれているのだ。

こうした九蔵との関係を演じた後、場面は九蔵殺害の当日へと移る。既に述べておいたように、舞台上に再

現された部屋で呉羽は九蔵を殺害するが、直後に部屋の窓から生蕃小僧が現れる。生蕃小僧は呉羽の犯行を知り、自分は呉羽の「生命がけのファン」なのだと言語。そして「アンタのしなすった事は、何もかもアッシンが背負って上げます」といい、轟殺しの罪を被ろうと持ち掛けるのだ。「その代わりにねお嬢さん」と語りかける生蕃小僧は、自分が逃走に成功したら「タッタ一度でもいいから、あっしの心を聞いてくださいよ」と伝え、窓から逃走する。呉羽はこのような振る舞いをみせた生蕃小僧を「女性としての私を恋する余りに、それこそ生命がけで私の罪悪をカバー」してくれたのだと言語している。犯行の真相が決定不可能であることは既に述べた通りだが、ここでもう一つ確認すべきは、呉羽の語りの中で、生蕃小僧が呉羽をどのように認識していたのかという点である。呉羽の語りによれば生蕃小僧は、呉羽のことを異性愛者の女性であると認識し、異性愛者である自分と関係を築ける相手として考えていたことになる。生蕃小僧にとって罪を被るということは、この物語に即して、呉羽との恋愛関係もありえるという認識のもとで行われているのである。

こうして舞台上で自分の過去と九蔵殺害を告白した後に、とうとう呉羽は自身が「十九歳に相成ります甘木三枝と申す男の子なので御座います」と告白する。子どもの性を反対にして育てると、無事に成長させることができるという風習に従った父・柳川は、三枝を女子として育てた。その結果、呉羽は「だんだんと大きくなってまいりますうちに、私自身でも、自分が男だか、女だかわからない位、声から姿までも……心までも女らしくなってしまうた」ところが、心が「いつの間にか男性として目醒め初めた」のだという呉羽は、九蔵の「執拗い変態的の愛がたまらなく厭になり」、「美鳥さんと一所になりたいばかりに」九蔵を殺害したと告白するのだ。ただし殺害した後で「夢から醒めたような気持」になり、「男性として眼醒めました私は、今度は男性としての良心に眼醒め初めた」という呉羽は、更に次のように付け加える。

私のような鬼とも獣とも、又は蛇だか鳥だかわかりませぬような性格の人間が、あの女神のように清らかな美鳥さんに恋をするのは間違っている。私のこの血腥い呼吸が、ミジンも曇りのないアノ美鳥さんのお顔にかかつてはいけない。私のこの爛れ腐った指が、あの美鳥さんの清浄無垢の肉体にチョットでも触れるような事があってはならないということを深く深く思い知りましたので、そうした私の心持を、ホンノ少しばかりでもいい、美鳥さんに理解って頂きたいばかりに、このお芝居を思い付いたので御座います。

つまり自分は男だか女だか、分からなくなったと語りながらも、美鳥に恋することで、男性という性_{II}セックスと異性愛者としてのセクシュアリティに目覚める呉羽は、しかし九蔵殺害後に「男性としての良心」に目覚めて美鳥への恋を断念するのだ。そしてその理由として呉羽は「鬼とも獣とも、又は蛇だか鳥だが」分からないような性格の自分が「清浄無垢」な美鳥に恋することはあってはならないからだと言るのである。このような呉羽の断念には、異性愛と同性愛をめぐる当時のセクソロジーの流行との密接な関係を辿ることができる。光石亜由美は「見た目の性別と身体の性別が一致することを〈自然〉と考える視覚のジェンダー規範が出来上がったのは、一九一〇年代で、そこにはセクソロジーという科学の視線が大きく関与」し、「一九一〇年代以降、〈女形_{II}女装_{II}変態〉という言葉説が登場してくる」と述べている。⁽⁵⁾光石はセクソロジー_{II}性科学が女装と変態とを結びつける大きな要因だと指摘しているが、こうした性科学と変態の関係はこの後も広まっていくことになる。川村邦光が指摘しているように「一九二〇年代から一九三〇年代にかけて、変態は性科学（セクソロジー）や精神医学・精神病理学において密接に性欲と結び」つくことになり、「性的な逸脱とみなされる

現象、異常なセクシュアリティを解釈するカテゴリー化する用語、「キーワード」となっていく。こうした変態という「カテゴリー」のなかに含まれたのが同性愛であり、異性装はその兆候の一つとしてとりあげられるようになるのだ。⁽⁶⁾

実際、性科学者の文章において同性愛と異性装は強い結びつきをもって論じられていることが多く、例えば川村も名前を挙げている性科学者の一人である羽太鋭二は「性欲の倒錯」を四つに区分し、「同性間性欲」をそのうちのひとつとする。そして同性愛者には「男性脱化、女性脱化」等の「不可思議なる現象」が確認される⁽⁷⁾といい、男性同性愛の最も進行したものを「女化」・「女性的男子」と呼び、「常に女装して女子と見られん事を熱望する」ものだとしている。同様の指摘は澤田順次郎も行なっており、男性同性愛者は身体的にも服装的にも女性に近づいていくものであるとし、その分析は羽太とほぼ共通する。澤田は先天的・後天的に同性愛を区別し、更に年齢や進行にそって五つの区分を設けるが、その中には「異性的変化」「異性化」という区分も見受けられる。ただし澤田は「異性的変化」は「男子において、精神的に自らを女子と感覚するもの」であり、「最も完成せられたものは、男子であって、女子の如くに、自らを感じるものである」と説明している。そして、そうした男子において「興味のあることは、その女装に対する嗜好」だと指摘する。また「同性愛の中でも、最も重症」である「女性化又女化」した男子について「好んで女装を為すものの興味ある研究は未だ十分でないけれども、或る学者の説に依れば、斯る男子の体格及び体質は、女性的であって、男性的体格は消滅せるものである」としており、具体的に「臀部の豊大」「乳房の肥大」「女性的顔面」などの特徴を挙げている。このように当時の性科学においては、女装や女性的な身体への変化は、男性同性愛の進行と深く結びついた現象として理解されていたのである。⁽⁸⁾それは今日からみれば、同性愛とトランスジェンダーを混同した奇妙な言

説にみえるが、しかし羽太銳二と澤田順次郎は、「二〇年代を中心として活躍した通俗的性欲学者」の中でも「人氣、実力ともに群を抜いて」おり、「両者ともにこの時代に大量の単行本を出版し、まさに通俗性科学界の両巨頭」とされる人物であり、当時の影響力は決して小さくなかっただろう。⁽⁹⁾ 美鳥が自分に向けられる同性愛的な視線を変態と結びつけるのも、呉羽が異性装を変態的な行為としてとらえるのも、こうした性科学の文脈と関連していたからだと考えることが出来る。⁽¹⁰⁾

このような同時代言説と関わりながら、呉羽は美鳥への恋愛感情から男性の異性愛者として自己を認識する一方で、現実には女装した男性という変態的な姿をしてしまっている自己も意識することになる。そして男性の異性愛者でありながら女装している変態という相反する自己認識に達した呉羽は、自分の変態性を理由に美鳥との恋を諦める前に、まず自らの変態性を払拭するために自分に性的な視線を向ける変態的な人物としての九蔵を拒絶する必要があると考えたのではないだろうか。つまり九蔵から向けられる同性愛の視線を拒絶し、美鳥との結婚を主張することで、呉羽はセックスが男性でセクシュアリティが異性愛者としての自己を立ち上げようとしているのである。

ただし、九蔵殺害には別の側面もあるだろう。九蔵と呉羽の関係は、同性愛的な関係であると同時に、「貴方のお人形さんに生まれ付いている犬猫」に対する愛情を向けられる支配と被支配の関係でもあった。こうした九蔵の視線は、実は「朝鮮人」への差別を含みながら、兆策・美鳥兄妹にも及んでいる。身寄りのない兄妹を朝鮮から連れてきた九蔵はこの二人を幼いころから養っているが、現在においても二人を「追いつき出さないとか」は自分次第であると考え、兄妹の自由を認めることなく自分の支配下においている。しかも舞台上で呉羽によって明らかにされるように、兄妹は時に「人間に立帰りたい」と思う九蔵を慰めるために飼われ

ている存在であった。つまり九蔵が兄妹に向ける視線もまた、慰めのために飼っている「犬猫」に向けるような支配者としてのものなのだ。九蔵は親をなくした呉羽や兆作・美鳥を保護しているかのように見せているが、実際には彼らの自由意思を認めず、自分の愛玩物として支配しているのである。⁽¹⁾つまり呉羽による九蔵殺害は、このような九蔵の支配から自立しようとし、かつそのような境遇に置かれた兄妹、特に自分が愛する美鳥を九蔵から解放しようとする試みとも考えられるのである。実際、呉羽の語りの中の九蔵は、呉羽を「飼って在る小鳥」とみなしており、そのような呉羽が自分ではなく美鳥と結婚することは「籠の中」から逃げ出すような暴挙として受けとめていた。その上で呉羽が美鳥との結婚を宣言し、反対する九蔵を殺害することは、自分を「犬猫」のように支配し、同性愛者の「妻」として自分と関係しようとする九蔵を拒絶した上で、男性異性愛者としての自分と美鳥を九蔵の支配から解放することを意味するだろう。

だが九蔵殺害によって異性愛者の男性としての自分を獲得したかに見えた呉羽は、過去を振り返ることで自分が女装者という変態であったことを再認識してしまい、そのことによって一度生まれた男性の異性愛者としての自己認識に綻びが生まれることになる。こうしていったんは築きあげた男性異性愛者としての自己が崩壊したことで呉羽は自分を「鬼とも獣とも」分らないものとして再認識し、このような自分が「清浄無垢」な美鳥と結ばれてはならないと考えるのだ。もちろんここにも同時代のセクソロジー言説との関連性が辿れることはいままでもないだろう。しかしこの断念こそが実は、男性異性愛者としての自己が崩れてしまった呉羽にできる数少ない男性性を再獲得するための戦術だったのではないか。そして、この男性性の再獲得という戦術を考える際には、新たに植民地の問題が浮上してくるのである。

第三節 変態／〈変装〉と植民地

呉羽が自らの過去によって決意した美鳥との恋愛関係の断念。それを当時の日本における民族的な血の序列から見れば、新たな問題が浮上するだろう。というのも、それは「朝鮮人」である美鳥と日本人である呉羽の結婚の断念であるとも考えることができるからだ。呉羽は舞台上で、結婚に反対する九蔵に対し、美鳥に「子守唄を唄わせて見せるわ」と言い放つが、これは呉羽が美鳥との間に子供をつくることを考えていたとみることもできる。だが、これも呉羽自身によって断念されることになる。そこに当時の植民地・朝鮮と日本の関係という視座を持ちこめば、以下のような別の側面が浮上することになるだろう。

一九一〇年の日韓併合により朝鮮を植民地とした日本は、一九一九年に起きた三・一独立運動を機に、それまでの「統治方針を『文化の発達と民力の充美』に変更し、『文化統治』を推し進める」ようになる。新たに朝鮮総督に就任した齋藤実は、「朝鮮人の地主や資本家ら富裕層を取り込み、親日層を形成しようとする」のだが、そうした統治の変化と共に「朝鮮人と日本人との結婚の奨励」も行われたという。⁽¹²⁾ この内鮮雑婚と呼ばれる日本人と朝鮮人の婚姻関係の奨励は、小熊英二によれば、同化政策を巡る対立として噴出する。内鮮雑婚に対し、一方には植民地との混血を忌避する純血論が、もう一方には同化を進める立場から結婚を奨励するものがあったのである。例えば小熊は一九一五年の河上肇の純血論が「朝鮮人との混血は『善馬』たる『日本人』の優秀性をそこなうからさけるべきだ」と述べていることを指摘し、それは「あくまで日本民族を優等民族とする人種思想」から生じたもので、「朝鮮総督府が同化政策の一環とした内鮮結婚奨励とは、まっこうか

ら衝突する」ものだったという。そしてこうした意見があらながらも一九三〇年代末から内鮮結婚は増加し、「神社参拝の励行、宮城遙拝」、「日本語普及の勸奨」、創氏改名などを内鮮一体のスローガンの下で行った皇民化政策⁽¹⁴⁾が本格化するにつれ、同化政策もいっそう促進されるが、一方でその反発としての純血論も高まり、一九四三年には厚生省が「混血防止がくりかえし強調されている」文章である『大和民族を中核とする世界政策の検討』を作成するなど、同化と純血の対立は以後も続いたというのだ。⁽¹⁵⁾ またこれに対して駒込武は、小熊の研究を評価しながらも「通婚の『奨励』や軍隊の徴集は、一九三〇年代後半以降の皇民化政策期のこと」であり、「少なくともそれ以前の段階で、政策理念として純血主義を放棄したという論拠とはなりえない」といっている。駒込は更に「皇民化政策期にさえも表層的な『奨励』の言説に反して、通婚が実際に認められた例は」「微々たるものであった」と述べており、一九四〇年以降でも「総督府レベル」では「通婚奨励」に対して「消極的だった」と指摘する。⁽¹⁶⁾ 現に駒込によれば、内鮮婚姻数は一九三八年で七四名であるとされ、奨励する意見があったにしては、決して多い数ではない。しかし、いずれにしても、『二重心臓』が発表された一九三五年当時、同化政策の中で雑婚と純血の対立が問題化されていたことは確かなことだろう。

ではこのような歴史的文脈との関連で、呉羽による美鳥との結婚の断念はどのように考えればいいのか。断念している以上、内鮮結婚が実現していないことは確かである。しかしその断念は、純血論に即して呉羽が日本民族の純血を守ったものとして単純に評価されるものかといえ、必ずしもそうとはいいきれない。この点に関して重要なのは、植民地との同化といってもそれが完全な平等を意味することはなかったということだ。内鮮雑婚を奨励する同化政策とは朝鮮の人々の「民族の独自性を抹殺し動員しようとした」ものであり、それに対して純血論が「異民族が流入してくることを忌避し、差別の根拠である民族の区別が揺らぐこと

を恐れた」という立場である以上、いみじくも小熊が「混合民族論」とは「同化しながら差別する」ことだと述べているように、同化政策においても常に日本民族が上位に存在していたのである。⁽¹⁷⁾つまり純血論にしろ、同化論にしろ、そこには日本人の植民地に対する優越が前提にあるのだ。

このような歴史的な文脈に照らせば明らかのように、呉羽による美鳥との結婚の断念には同時代状況との大きな齟齬が生じている。呉羽は自らの変態性を省みて「鬼とも獣とも」分らない自分が、「純真無垢」な朝鮮人である美鳥と結ばれることは許されないと述べていた。呉羽の断念とは、女装という変態的な行為をしていた自分が、セックスにおいてもセクシュアリティの序列においても逸脱者であり、「無垢」な美鳥よりも劣位にあるということを認識したうえで行われたものである。つまり呉羽は、婚姻関係の断念を人種の優劣ではなく、むしろ日本人である自分の変態性が、「無垢」な朝鮮人の美鳥にはふさわしくないとする点において、同化論と純血論において共通する日本人の優越性とは大きく異なった立場に立っているのである。呉羽による断念は、日本人の優越という民族的な血の序列を、変態と「無垢」という性の序列によって転倒させてしまっているのだ。この序列の転倒は、皮肉なことに異性愛体制を前提とし、変態を劣位に置くという性の序列における差別性が温存されることによって達成されているのである。

しかも『二重心臓』には朝鮮のみならず、生蕃小僧、つまり台湾に関わる表象も登場していた。「生蕃」とは台湾の高地民を指す言葉であり、当時の日本においては文明化されていない〈野蛮〉なイメージが強い言葉であった。「生蕃」は、「日本が台湾を領有する過程で」「激しい抵抗運動を展開」するが、そうした中で彼らを「恐れ野蛮視する意識は、一九三〇年の霧社事件によって決定的なものになる」という。⁽¹⁸⁾菊池一隆の説明によれば、霧社事件とは一九三〇年に発生した原住民であるタイヤル族によって、公学校運動会に集まった日本

人の老若男女一三四人が殺害され、更に警察局や公共機関などが襲撃されて武器などが奪われた大規模な反乱事件である。総督府は、軍隊や警察を投入。日本を支援するタイヤル族の「味方蕃」の力を借りながら五十日ほどで鎮圧に成功した。事件の指導者モーナ・ルダオは自殺、首謀者と見なされた十数人は処刑され、投降に不服な原住民二〇〇人も集団自殺した。この反乱には当局が優遇し、警察に勤めていた原住民エリートの参加も噂されたため、「理蕃政策が成功していると考えていた模範地域である霧社」での抵抗運動に総督府は衝撃を受けたという。⁽¹⁹⁾ 事件後、統治政策の変更を余儀なくされた政府は「理蕃政策大綱」を通達し、「教化」という名の下で、「蕃地」の『内地化』を目指す『統治実践』を行い、その結果、原住民のイメージは〈野蛮〉から『教化』を受け入れつつあるものへと変容したともいうが、⁽²⁰⁾ しかし、このような理蕃政策は先住民の「生活様式の〈日本化〉を推し進める一方で、他方ではそれをあくまで『外面的同化』と退けることで、いつまでたっても『本当の日本人』にはなれない〈未開な〉先住民の姿を繰り返し見いだしていくこと」にもなるというのである。⁽²¹⁾

このように〈野蛮〉や〈未開〉というイメージがまだ根強く残っていた「生蕃」をあだ名とする人物が強盗殺人者として登場しながら、その一方で呉羽の物語においては彼女への恋心から自ら罪を被り、自己犠牲を行う人物として登場すること。そこにも植民地表象との微妙な関わりが生じているのだ。

生蕃小僧は呉羽の父である甘木柳川を殺害するが、金銭的な成果を得ることは失敗する。それは九蔵が甘木家の財産の大半を隠し持っていたためであった。生蕃小僧にしてみれば、九蔵を利用することで犯罪をしようとしたが、逆に九蔵に利用されてしまったことになる。生蕃小僧は確かに悪質な犯罪者ではあるが、九蔵は更にその一步先を行く狡猾さや悪質さを持った人物として呉羽の物語では描かれているのである。加えて重要

なのは、呉羽の殺人の罪を肩代わりしただけにとどまらず、呉羽が舞台上で真相を明らかにしようとしていると取調室で聞くと、刑事に懇願してまで公演を止めさせようとする生蕃小僧の姿勢が、呉羽が美鳥との結婚を断念した行為に通じている点である。異性装という変態的な過去を理由に美鳥を諦める呉羽は、視点を変えれば断念という形の自己犠牲によって、美鳥の「無垢」を守ろうとしていると見ることもできるのだ。そしてそれはすべての罪を被って、呉羽を守ろうとする生蕃小僧の姿に通じているだろう。

呉羽がこのような自己犠牲によって再構築しようとする男性性は、一九三〇年代における〈男らしさ〉と無関係ではない。特に軍隊では「兵士一人一人の個性、人生、生命への配慮は急速に後退し」、一九三八年に刊行された『作戦要務令』において「一死報国的」な文面が付与されるようになるという。⁽²²⁾ また荻野美穂は一九二〇年代の「男性美」を論じ、「しばしば登場する「武士道」や「大和魂」「死に方の美学」のような「男性美」が三〇年代において、「男たちを戦争とそこの死へと駆り出すレトリック」となっていくと指摘している。⁽²³⁾

このように、命を賭けた自己犠牲そのものが〈男らしさ〉と結びつく時代において、生蕃小僧の自己犠牲の精神は、男性性の証明の戦術として、舞台上で呉羽に模倣されることになる。しかしここで重要なのは、これが当時の〈男らしさ〉の素朴な反映とは異なっているということだろう。日本人の男性にとって、崇高な大日本帝国のために命を賭け、自己を犠牲にすることこそが男性性の確立であるという同時代の文脈からすれば、朝鮮人の「無垢」を守るために呉羽が自己を犠牲にしようとすることは、身を捧げる対象を誤認し、日本と朝鮮の間の民族的な序列を転倒する行為だからである。そして、そうした日本人の男性性を模倣するに当たって参照されるのが台湾の植民地的表象を担い、日本の支配に対し抗戦し続けた〈野蠻〉な「生蕃」小僧であるこ

ともまた、皮肉な批評性をはらむことになる。帝国に命を捧げるために用いられた自己犠牲という日本人の男性性を模倣した「生蕃」小僧を、日本人男性としての男性性の再獲得のための手本として呉羽が模倣し、朝鮮人のために実行すること。こうした関係性には民族的な序列や日本人の男性性を転倒し攪乱する契機が潜んでいる。⁽²⁴⁾つまり女装することによって自分の性が判別できなくなり、〈変装〉と生身の実体が〈決定不能〉になっってしまった呉羽は、変態である九蔵を処刑することで異性愛の男性としての自己を立ち上げようと〈変装〉する。だがそれが崩壊した後は、自己犠牲性を模倣することで男性性を獲得し、更に別の〈変装〉を重ねることになるのだ。そしてこの異性愛者としての男性性を獲得するための〈変装〉の過程において、植民地と帝国における民族的な序列が問題化され、支配と被支配をめぐる既存のイメージがかき乱されることになるのである。⁽²⁵⁾

だが、それに加えて呉羽が男性性を獲得するために行う〈変装〉には、もう一つの問題がはらまれている。呉羽は自らのセックスが判別できず、男性・女性のいずれの振る舞いもできる人物であった。女性としての呉羽の振る舞いが、ジェンダーとしてもどれだけ自然であったかは、笠や兆作が本気で呉羽に恋をし、結婚を申し込んでいたことからでも明らかである。そして最後の舞台の上で、呉羽は自分のセックスを男だと語る。しかしこの告白が、呉羽のセックスの〈真相〉を知っていたであろう唯一の人物・九蔵が殺害された後でなされていることは単なる偶然ではないだろう。呉羽のセックスは、「湯殿の入口をガッチリと鍵かけて、誰が来ても這入らせない」で「自分の肌を他人に見られるのが死ぬより嫌い」だと作中で語られることで、第三者による確認が容易ではないことが示唆されている。幼い頃から呉羽を育ててきた九蔵なら、その〈真相〉を知っていただろうが、その九蔵が死んでしまえば、生物学的な性別を確認した他者はいないともいえる。呉羽はいま

や自身のセックスを自由に構築し〈変装〉することが出来るのである。おまけに舞台上の九蔵の話はすべて劇中の呉羽の告白の中にあっただから、呉羽が女装させられた男の子として育てられ、九蔵がそれを知っていたはずだということさえもが、実は呉羽によって構築された可能性すらあるのだ。つまり呉羽の繰り返される〈変装〉は、すべて呉羽が作り出したものであり、呉羽のセックスの〈真相〉は〈決定不能〉なままなのだ。

こうして『二重心臓』には〈変装〉の連鎖によるセックスのパフォーマティヴな性質が浮かび上がってくる。しかもそれはセクシュアリティやジェンダーの問題にも波及することになるのだ。異性装という形を取り、自らの性を〈変装〉し、男性／女性の二分法を超えて、好きな時に好きなように振る舞うことができるということ。それはジュディス・バトラーが示した、性を「コンスタティブ」なものではなく「パフォーマティヴ」なものとして捉える視線に通じるものがある。⁽²⁶⁾バトラーが参照しているJ・L・オースティンの説明を用いれば「コンスタティブ」とは「事実確認的」な発言を意味し、既に確定した事実について伝える行為であり、「パフォーマティヴ」とは「行為遂行的」な発言を意味し、「その文を口に出して言うことは、当の行為を実際に行うこと」を意味する。⁽²⁷⁾例えば結婚式での「私は結婚します」という誓いや、「この船を『エリザベス女王号』と命名する」などの宣言が「パフォーマティヴ」な発言として考えることができる。バトラーはこのような考え方を利用して、セックスについてのアイデンティティとは「コンスタティブ」な発言によって確定したある事実として確認されるものではなく、むしろ社会的文化的な言説において「パフォーマティヴ」に構築されるもの」と主張するのだ。

バトラーは異性装について「ジェンダーを模倣することによって、異装はジェンダーの偶発性だけでなく、ジェンダーそれ自体が模倣の構造を持つことを明らかにする」と述べ、「セックスとジェンダーの統一的な因

果關係を自然で必然だと規定している文化配置に逆らって、両者の關係はそもそも根本的に偶発的なものだという認識」を持つときに「パフォーマンスの眩暈」は生まれるとしている。ここでバトラーが述べる「パフォーマンスの眩暈」と呉羽の〈変装〉は結びつけることができるのではないだろうか。九蔵が死に、呉羽の本当のセックスを知る者はこの世にはいなくなり、呉羽一人を除けば、誰ひとり呉羽の性別について知るものはいない可能性が高いことは先に述べた。その上で呉羽は自らのセックスについて舞台上で語る。その時、明らかになるのは、呉羽が笠や兆策に対しては、彼らの願望に沿うように女性らしさのジェンダーを語り／演じて、美鳥に対しては彼女と結ばれるために男性のジェンダーを構築しようとしていたということだ。セックスが第三者によって断定されない呉羽は、相手との対話や舞台上での告白というパフォーマンスの過程で、〈女らしさ〉や〈男らしい〉自己犠牲といった当時の紋切り型のジェンダー特性をあえて模倣して演じ分け、そうすることで自らのセックスすら思いのままに〈変装〉させてしまうのである。つまり、ジェンダーにおける模倣や演技という〈変装〉を通して、セックスをもパフォーマンスな行為によって変更可能なものとして示しているのである。呉羽の〈変装〉はバトラーが述べているように、笠や兆作、そして呉羽自身も含めた当時の人々が認識していた「ジェンダーを模倣」することで、セックスとジェンダーの因果關係を自然なものではなく、「偶発的」なものに変えてしまうのだ。そしてそれは、生蕃小僧の自己犠牲を模倣するという行為を通じて「ジェンダーそれ自体が模倣の構造を持つことを明らか」にすることも連繫している。このように『二重心臓』では、バトラーが性別を決定する医学的な言説などに見出したセックスのパフォーマンスな構築性が、呉羽の演劇的なパフォーマンスとして示されているのだ。そしてこうした〈変装〉の性質のために、呉羽のセックスが本当に男性であり、美鳥への恋心から改めて自身が男性であると認識し、一連の行為で自らの男らし

さというジェンダーを回復しようとしたのか、それともセックスは女性なのに、パフォーマンスに自分の男らしさを自己犠牲によって示そうとしていたのか、〈決定不能〉な事態を招いている。しかもセックスが〈決定不能〉である以上、呉羽が異性愛者なのか同性愛者なのかすらも確定できない。呉羽の演劇的なパフォーマンスはセックスとジェンダーとセクシュアリティを〈決定不能性〉の中に〈宙吊り〉にしてしまうのだ。

呉羽のセックスが男／女に断定できず、セクシュアリティも異性愛／同性愛のどちらにも決定できない以上、呉羽を取り巻く恋愛関係にも問題が発生することになる。女性としての呉羽を愛した異性愛者である笠・兆作・生蕃小僧は、呉羽のセックスが男性であるならば、男性に恋愛感情を抱いた同性愛者となってしまう。女性の異性愛者である美鳥は女性同性愛者としての呉羽を拒絶しながらも、男性異性愛者としての呉羽には心惹かれる様子が描かれていたが、もし呉羽のセックスが女性ならば、美鳥は女性としての呉羽に心惹かれていた女性同性愛者の可能性も出てしまうのだ。無論、笠・兆作・生蕃小僧の物語―女性異性愛者としての呉羽―が〈真相〉なのかもしれないし、美鳥の物語―女性同性愛者のように見えるが、男性異性愛者の可能性もある呉羽―が〈真相〉の可能性もある。だが結果的に、彼らの物語の中における呉羽のセックスとセクシュアリティの断定も、どれが正しいと決定することができず〈決定不能〉に陥るしかないのだ。⁽²⁸⁾

いずれにしても舞台は呉羽の告白とともに銃で頭を撃ち抜くことで幕を閉じる。一見、性をめぐる混乱は、呉羽の自殺とその後の解剖によって〈真相〉が明らかにされることで収束するものと思われる。だが呉羽の自殺を見た観客たちが「シバイダ……」と語る有様にも見る事ができるように、本当に呉羽が自殺したのか、それとも舞台における演技なのかを判別する術はない。もし演技であれば、呉羽の生物学的なセックスが解剖によって明らかにされることはないだろうし、また現実の死であったとしても、この作品には解剖による〈真

相〉の究明は書かれていないのだ。呉羽が語った男性としての自己も女性としての自己も、コンスタティブなものだったのか、パフォーマンスなものだったのか、この小説においては誰にも判断できないのである。そもそも、呉羽が真実を語ったとされる一連の告白が「二重心臓」という舞台のなかのものであったことを思い返せば、殺人の自白も、性別の告白もすべてが演技・フィクションであった可能性も消すことはできないだろう。つまり探偵小説的な殺人事件の〈真相〉も含めて、舞台上で行われた告白という行為自体が演技なのか〈真相〉の暴露なのか判断ができない事態に陥っているのだ。呉羽の性セックスも、そして事件の〈真相〉すらも確定できず、すべてが互いに矛盾し合うという〈決定不能性〉によって〈宙吊り〉にされている作品。それが『二重心臓』なのである。

終わりに

こうしてみれば明らかのように、『二重心臓』の特徴とはその〈決定不能性〉にある。この物語で九蔵は過去に「シャロック・ホルムズ」であったと語られ、兆策もまた「シャロック・ホームズ」として笠を探偵する。笠は呉羽を追いつめることに探偵的な快楽を感じ、美鳥は男装しカフェに潜り込み、盗み聞きや盗み見を働く。『二重心臓』では登場人物の多くが探偵として、〈真相〉を追い求める。そしてそれは呉羽も同じであった。呉羽が舞台上で頭を打ち抜く時、理由として語ったのは「私だけの真実に生きて行きたくなかったから」なのである。そして、〈真相〉を追い求める登場人物たちは〈決定不能〉に陥った〈真相〉を前に、ただ根拠に乏しく、時に自らの願望をすら織り交ぜた物語を創り上げるしかないのである。

このような『二重心臓』の〈決定不能性〉は、『ドグラ・マグラ』をはじめとした夢野久作の作品に見られる、アイデンティティの喪失や揺らぎの変奏の一つだとすることもできる。自らの物語を創り出し、アイデンティティを〈変装〉すること。それによって規範をずらし、権力に抵抗することも可能であろう。そして、『二重心臓』は犯人当てをうたい、懸賞をかけるなど、一つの〈真相〉を前提とした探偵小説でありながら、〈決定不能性〉を導入することでそうした抵抗の戦略を描いた稀有な作品なのである。

付記 『二重心臓』の引用はすべて『夢野久作全集10』（筑摩書房、一九九二年）によった。なお引用の際、旧字は適宜新字に改め、ルビは省略した。

注釈

- (1) 中島河太郎「解説」(『夢野久作全集』三一書房、一九六九年)
- (2) 西原和海「解説」(『夢野久作全集10』筑摩書房、一九九二年)。なお西原は『定本 夢野久作全集』(国書刊行会、二〇一八年)の「解題」でも『二重心臓』について「大傑作」かは「大いに疑問がもたれる」とし「書き急ぎの感が印象され、作品の完成度に物足りなさが残る」と否定的な評価を下している。
- (3) 細川涼一「夢野久作・湊谷夢吉とアナスタシア伝説」(安達太郎・野村幸一郎・林久美子編『表象のトランスジェンダー』新典社、二〇一三年所収)。細川涼一は『死後の恋』でアナスタシアは男装して白軍兵士にまぎれ込んだ。『焦点を合わせる』(一九三二年六月)の男装する女スパイ青紅、『犬神博士』(一九三一年九月―三二年一月)の女装して踊る男児の芸人チイ、『暗黒公使』(一九三三年一月)の女装する美少年呉井嬢次など、異性装による性の転倒は夢野久作が繰り返し描いたテーマである」と述べ、そのような異性装は「性の転換と仮装による日常性の断絶」の事

例でもあると分析している。

- (4) ここでいう性セックスについては森山至貴の定義に従いたい。森山はセックスについて「医学（や生物学などの自然科学）」が「身体の特徴によって私たち」に割り当てる「女あるいは男という『性別』あるいは『男女』間の差異（性差）」であると説明している（森山至貴『LGBTを読み解く』筑摩書房、二〇一七年）。ただし、この作品の中では、それぞれの人物の願望によってセックスが構築されている点にも注意したい。
- (5) 光石亜由美「女装と犯罪とモダンズム―谷崎潤一郎「秘密」からピス健事件へ」（『日本文学』58（11）二〇〇九年十一月）
- (6) 川村邦光「日常性／異常性の文化と科学―脳病・変態・猟奇をめぐる―」（『岩波講座近代日本の文化史』5 編成されるナショナリズム』岩波書店、二〇〇二年所収）
- (7) 羽太鋭治『變態性慾の研究』學藝書院、一九二二年（斎藤光編『近代日本のセクシュアリティ』3 「性」をめぐる言説の変遷』ゆまに書房、二〇〇六年所収）。なお、この時期の同性愛には「先天的」と「後天的」の区分がなされており、発展の仕方も異なるものとして説明されている。「脱化」は後天的な発展であり、「女化」は先天的な発展とされているが、最終的に男性は女性に、女性は男性に身体的・性格的に近づいていくという過程は、ほぼ同じである。
- (8) 澤田順次郎『變態性医学講和』通俗醫學書刊行会、一九三四年（『性と生殖の人権問題資料集成三十三卷 性科学・性教育編』不二出版、二〇〇二年所収）。興味深いことに、澤田は「習慣性のものであり、同性愛とは関係ない」としながらも女装として、「両親の迷信によって女装せられたもの」を挙げている。澤田によれば「子供のよく育たない家で、その子を壮健に育てる」ためには「異性の着物を着せて、男の時には女装、女の時には男装をさせて置く」と、その子は壮健に育つといふところから、女装の男子がよくあったのである」している。呉羽の子供時代の女装はこの澤田が指摘する「迷信」によるものだった可能性もあるだろう。だが、本来この女装が子供時代に限定されていたのに対し、呉羽の女装が続き、自分の性別が判別できなくなったという結果がある以上、女装の持つ力は「迷信」以上のものがあったといえるだろう。
- (9) 古川誠「恋愛と性欲の第三帝国 通俗性欲学の時代」（『現代思想』21（7）一九九三年七月、青土社）
- (10) 当時、女性同性愛は男性同性愛に比べて、女学生時代などにはある程度許容されていたが、そこには卒業後は結婚

- し、異性愛者になるという前提があった。それゆえ、異性愛に戻らない女性同性愛者も身体の変化が生じうる「変態性欲」の一種として、前掲した羽太や澤田の著書では詳述されている。この点に関しては浅野正道「やがて終わるべき同性愛と田村俊子」『あきらめ』を中心に、「日本近代文学」65(二〇〇一年十月)も参照した。
- (11) こうした九蔵の支配をサディズムと関連づけることもできるだろう。呉羽は舞台上で九蔵のことを生蕃小僧を「狂い死させる設備」を作り、見物人まで呼ぼうとする変態的な嗜虐者として描いていた。
- (12) 成田龍一『大正デモクラシー』(岩波書店、二〇〇七年)
- (13) 河上肇「日本民族の血と手」九「大阪朝日新聞」、一九一五年六月二六日、のち『祖国を顧みて』、実業之日本社、一九一五年所収)。この文章で河上は「種々なる血液が絶えず流れ込んで居る所には決して感情及思想の国民的統一を見ることは出来ぬ」とし、「日本人独特の鞏固なる国民性と国家」を持ち得るのは「全く吾々の祖先が久しく其血液の純潔を維持し来つた」からであるとしている。河上は「日本人位優等人種成立の条件を完全に具備した者は、東洋は勿論全世界に於て其例を見ぬ」と言い、「朝鮮人」「支那人」と日本人は髪・眼の色は酷似し、大差がないが「過去二千年の歴史に於て彼我の間には雲泥の差異がある」とし、その優越性を主張している。
- (14) 徐京植『皇民化政策から指紋捺印まで』(岩波書店、一九八九年)
- (15) 小熊英二『単一民族神話の起源』(新曜社、一九九五年)
- (16) 駒込武『植民地帝国日本の文化統合』(岩波書店、一九九六年)
- (17) 小熊前掲書
- (18) 星名宏修『植民地を読む』(法政大学出版社、二〇一六年)
- (19) 菊池一隆『日本軍ゲリラ 台湾高砂族義勇隊』(平凡社、二〇一八年)
- (20) 松田京子『帝国の思考』(有志社、二〇一四年)
- (21) 阿部純一郎『移動』と『比較』の日本帝国史』(新曜社、二〇一四年)
- (22) 荒川章二『兵士たちの男性史』(『男性史2 モダニズムから総力戦へ』日本経済評論社、二〇〇六年)
- (23) 荻野美穂「一九二〇年の「男性美」」『性』の分割線』青弓社、二〇〇九年所収)
- (24) 植民地となった台湾の教育において、自己犠牲の持つ意味は重い。義勇隊に志願した複数の高砂族にインタビュー

した菊池一隆は、高砂族に対し、日本人が「兵になってこそ『真の男となれる』と喧伝していた」様子や、学校では「犠牲的精神」を教えられ、教師が『「兵士になってまともになり、真の男になる」』とも言っていたことを記述している。そのうえで彼らにとって『「日本人になること」』は『天皇・日本国』に『忠』を示すためにも『死ぬこと』に直結していくことになるのである」と指摘している。(菊池前掲書)。この視点からは生蕃小僧の自己犠牲が、より植民地的な文脈をもって浮かび上がってくることになるだろう。また、駒込前掲書によれば、台湾の教科書には能久親王が「台湾を文明化するために『御身を棄て』た」逸話や「吳鳳が原住民の文明化のために自分の命を犠牲にした」伝説が掲載されており、こうした自己犠牲の物語によって「天皇・皇族への崇敬の念を含めて、漢民族が文明の担い手としての総督府権力に自己同一化することを期待していたのではないか」と指摘している。台湾における自己犠牲の精神は〈男らしさ〉と共に、植民地・台湾における支配と文明化の問題へと連絡しているのである。

(25) なお、民族的な劣位に置かれた朝鮮人である美鳥の「無垢」を、吳羽が断念によって保護することは、民族的な優位に置かれたものとしての務めとして妥当であり、民族的な序列の転倒は起こらないのではないかと疑問もあるかもしれない。だが、まさに九蔵がそうした優位な立場を利用し、保護という形で美鳥や兆作を支配していたということに吳羽が批判的であったことを鑑みれば、九蔵と同じような立場を吳羽がとるとは考えにくい。

(26) ジュディス・バトラー 竹村和子訳『ジェンダー・トラブル』(青土社、一九九九年)

(27) J・L・オースティン 坂本百大訳『言語と行為』(大修館書店、一九七八年)

(28) このように吳羽のセックスは他者には〈決定不能〉である。だが笠の話によれば、吳羽は九蔵に美鳥から「お姉さんお姉さんと呼ばれ」たいという女性同性愛的な欲望を話しており、その一方で舞台上では自らを男性異性愛者として立ち上げようとしていた。こうした矛盾からは例えば、吳羽が実は両性具有者であり、そのために吳羽自身も自分のセックスを〈決定不能〉であったという可能性も浮上させることができるだろう。だがそうした可能性も根拠がない以上、〈宙吊り〉にされるしかない。

Hentai (sexual perversion) and colony: A study of Kyusaku Yumeno "Nijyu-Shinzo"

WAKISAKA, Kensuke

"Nijyu-Shinzo" is a story written by Kyusaku Yumeno in 1935. This work has been treated as a failed work so far, but in this paper, I analyze the Korea/Taiwan as a colony and protagonist Kureha Amakawa as a crossdresser in order to show how ethnic hierarchies change by sexuality and gender.

In this era, crossdress were in a category of homosexuality or "hentai (sexual perversion)". Based on that norm, Kureha believes himself as a "hentai" and thinks that he should not marry with innocent Korean Midori. This is change of the ethnic hierarchy which the Koreans of the colonies was in a lower rank and the Japanese was in a higher it. In addition, his appearance to sacrifice himself for the Midori indicates the Japanese masculinity in this era. However, it is an imitation of a Seiban kozou who has the image of indigenous peoples of Taiwan, who suffered the crime of Kureha, which also changes the hierarchical relationship between Taiwan and Japan. Then the biological sex of Kureha is not disclosed man or female in the work. In that situation, Kureha tries to acquire masculinity and heterosexuality by telling. It can be said that it shows the performative character of sex.

"Nijyu-shinzo" is crossed performative sexual perspective and colonialism perspective about ethnic hierarchy, and by creating yourself by talking about your sexual identity that is connected with the multiplicity of the story and it becomes a resistance strategy to the norm.